

「言い誤り」(Speech Errors)の傾向に 関する考察(I)

伊藤 克敏

伊藤(1985)で大人の言い誤りと子どもの習得途上言語(developing language)の相関性について考察したのであるが、本稿では大人の言い誤りの実例の分析を通して言い誤りの傾向をさぐり、その神経心理言語学的理由を検討しようとするものである。

1. 発音の誤り

1) 弛緩化現象

[s]→[ʃ]

- (1) シャ(サ)ラ金
- (2) 朝しえ(せ)ん人民共和国
- (3) そうしゅ(す)るわ
- (4) インディアンがしゅ(す)んでる
- (5) しゃ(さ)とう
- (6) 純情しよ(そ)うな
- (7) シュ(ス)カート
- (8) 接戦のしゅ(す)え
- (9) 餓死しゅ(す)る

* ()内は意図した音

日本語の「ス」音は「シュ」音よりも緊張(tense)音であり、生理的により楽な弛緩音の「シュ」に置換えられる傾向がある、といえよう。

[ʃ]→[tʃ]

- (10) もち(し)
- (11) ち(し)ょうぼうち(し)ょ [消防署]

[ts]→[tʃ]

- (12) はちゅ(つ)の(初の)

- (13) ちゅ (つ) ば
- (14) ちゅ (つ) ぎのちょうだい
- (15) うちき (つく) しき

[s]→[ts]

- (16) つ (す) きやき
- (17) つかまつりまつ (す)

日本語の [tʃ] は [ʃ] よりも、また [tʃ] は [ts] よりも生理的に楽で、後者よりも前者の方がより無標 (unmarked) 音であるといえよう。(11)では最初の音の /ʃ/ が /tʃ/ に置換わり、それに引かれ (attraction) て後の句末の /ʃ/ も /tʃ/ と変化していったものと思われる。(14)は後に来る「ちょうだい」の /tʃ/ と逆行同化して「つぎ」の /ts/ が /tʃ/ に置換えられたと考えられる。

[s]→[t]

- (18) タ (サ) ラリーマン
- (19) たいて (せ) つです

/s/が、同じ調音点であるが閉鎖音である /t/ に置換えられる現象は幼児にもある (伊藤 1985, 参照)。

[z]→[ʒ]

- (20) じゅ (ず) し [逗子]
- (21) どうじょ (ぞ)
- (22) じゃ (ざ) ぶとん
- (23) レインシュージュ (ズ)
- (24) しんじょ (ぞ) う [心臓]

/z/→/ʒ/ は /s/→/ʃ/ の有声化対応音で、緊張音の弛緩化であり、生理的に発音しやすい方に置換えられる現象といえよう。

以上、歯擦音、破擦音の誤用発音 (mispronunciation) をみて来たのであるが、日本語の場合、同じ歯擦音でも緊張音の /s/ /z/ はそれぞれ弛緩音の /ʃ/ /ʒ/ に置換えられる傾向があり、同じことが /t/ が加わった /ts/ /tʃ/ についてもいえるようである。また /ʃ/ が /tʃ/ に置換わるということは、歯擦音よりも破擦音の方が発音しやすいといえるかも知れない。幼児の発音の発達においても /ʃ/ よりも /tʃ/ の方が早いようである (伊藤 1985,

参照)。以上の誤用関係を図示すると大体図1のようになる。

田総(1982)は/sh/を/s/の口蓋化音として捉えている。しかし、調音音声学的には口蓋化は弱く、むしろ音響音声学的に言えば緊張音の弛緩化とみた方がよいのではなからうか。そうすれば田総氏自身も/s/→/sh/の変化の頻度が高い原因は「単に外的要素の影響による変化にあるだけでなく、音自身が内包する調音生理的な理由があるのかも知れない。」と述べているように、緊張音よりもより発音しやすい(労力が要らない)弛緩音に変化した、と考えた方が事実に近いのではないかと思われる。

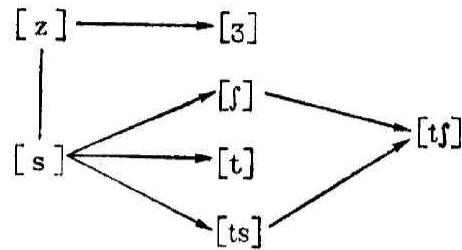


図1 [s] [z]の変化方向

2) [y] 音挿入

- (1) きゃ(け)さ〔今朝〕の始発から〔TV〕
- (2) 排斥のきゅ(く)うき〔空気〕が強まって〔TV〕
- (3) きんきゃ(か)い〔近海〕もの
- (4) きゃ(か)わいい
- (5) さいきょ(こ)う〔最高〕
- (6) ゆうびょ(ぼ)う〔有望〕な子
- (7) きにょ(の)う〔昨日〕
- (8) わりゃ(ら)っちゃう
- (9) 女しょう(僧)
- (10) それもしょ(そ)うでしょう

(1)から(5)までは /k/ 音から /a/ /u/ /o/ 音への移行過程に /y/ が挿入される場合で、(6)から(10)までは、/r/ /n/ /b/ /ʃ/ 音から /a/ または /o/ 音への移行過程に /y/ 音が挿入される、という例である。一応、図式としては子音と母音の間に一種の「わたり音」(glide)として /y/ 音が挿入される、ということになるが、注目すべきことは、最後の母音が [i], [e] のような前母音でなく [u], [o], [a] のような後母音である、ということである。こういった口蓋化の現象は子音から母音への移行がよりしやすいためである、という調音生理的理由によるものと考えられる(田総 151頁)。また、

名古屋方言で「ありゃ-すか」（ないよ）とか「いかんぎゃ」（いけないよ）のように口蓋化が起きているのは興味深い。三重県鈴鹿地方の老女が「きんにょ」（昨日）といていたのを耳にしたことがある。

3) 母音交替——[a] 母音化

- (1) テープレカ (コ) ーダー
- (2) みか (こ) み [見込み]
- (3) ひた (と) り
- (4) 大正が (ご) と [琴]
- (5) が (げ) ん酒 [原酒]
- (6) いた (と) ぐち [糸口]
- (7) おふら (ろ) [お風呂]
- (8) よな (ね) つ [予熱]
- (9) プラ (リ) ーズ [プリーズ]
- (10) てら (れ) くさい
- (11) きわだ (ど) い
- (12) さ (そ) ろばん
- (13) カラオカ (ケ)
- (14) くま (も) りぞら
- (15) うわてひな (ね) り
- (16) 家庭内暴りゃ (りょ) く
- (17) しら (ろ) いバン [車]
- (18) 頭にはしら (ろ) いものが見え……
- (19) 元気をつか (け) なぎゃ
- (20) 授業をすっぱ (ぼ) かす
- (21) じゅうら (ろ) くさい [16歳]
- (22) おさか (け) のさかな
- (23) 議ら (ろ) んした
- (24) インダ (ド) シナ
- (25) こんだ (ど) の問題
- (26) きらい (れい) に

ヤコブソン (1968) は [a] を「最善母音」(optimal vowel) と呼び、最も「基本的、原初的」母音である、としている。上に見た [a] 音化は同化

現象の場合も少なくないが、(9)までのように独立に起っている場合もあり、これまでのデータでは[a]音化現象は他の音に比べて圧倒的に多い。ところで[a]に変化する音の種類と傾向は今までのデータでは図2のようになっている。

[o]と[e]が[a]音化しやすいのは、図2からも明らかなように調音点が近いからといえようし、[i][u]音が[a]音化し難いのは調音点の距離が遠いからだという生理的な理由からであろう。

[o]	→	[a]	30例
[e]	→	[a]	11例
[u]	→	[a]	2例
[i]	→	[a]	2例

図2 [a]母音化傾向

4) 同 化

(a) 順行同化

- (1) 不まん〔満〕を表めん (い)〔明〕する
- (2) リプトんは最こん (う)〔高〕だね
- (3) なん〔南〕北たん (い)わ〔対話〕
- (4) 息を吸う吐う (く)は
- (5) おまま (わ)りさん
- (6) 広しま〔島〕しま (な)い〔市内〕
- (7) 川へ洗濯へ (に)
- (8) かいさい (ん)〔解散〕
- (9) ちっとも後悔ち (し)ていません
- (10) フラッシュダンシュ (ス)
- (11) しょう〔賞〕をしょう (そう)なめ
- (12) 久しぶし (り)
- (13) ぎんせが (か)い〔銀世界〕
- (14) 詩じょう (情)をそぞ (そ)られる

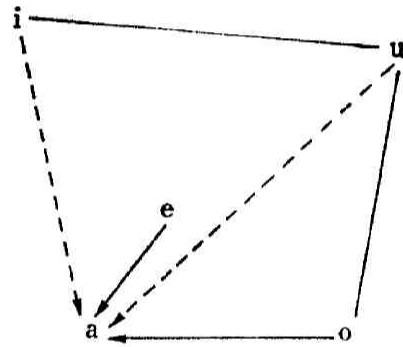


図3 [a]母音化方向

同じ音を繰り返すことは発音の容易化に通じるのであるが、(9)では /ʃ/ が /tʃ/, (10)(11)では /s/ が /ʃ/ に各々同化変化している。注目すべきは(1)(3)でみたように、より発音しやすい音に変化している、ということである。(13)(14)では濁音が同化しているのであるが、濁音も発音の容易化に貢献しているのであろうか。東北地方の方言に濁音化しやすい現象があるのは興味

深い。

(b) 逆行同化

- (15) 防えん (い) [衛] 力の水じゅん [準]
- (16) すむ (ぐ) さむくなる
- (17) に (ぎ) ゆうにく [牛肉]
- (18) ナル (チュ) ラル
- (19) ビジネル (ス) ホテル
- (20) 選ばく (つ) [抜] 行進きょく [曲]
- (21) はい (ん) たい [反対]
- (22) おっちょ (こ) っちゃった
- (23) しっかし (り) してる
- (24) しゅっち (し) んち [出身地]
- (25) やったらでっかい
- (26) しんぶ (く) うパック [真空パック]
- (27) まの (ど) [窓] など

(1)(2)(3)(4)(5)(15)(16)(17)のように比較的発音しやすい /n/ や /m/ 音に、また、すでに上述したように /ʃ/ が /tʃ/ に、/s/ が /ʃ/ に置換わるという同化現象から、同化は一般的に発音しやすく、生理的労力のより少ない音の方向に起こりやすいということがいえよう。(23)は前後に /s/ 音があり、両方からの同化作用が働いている。(27)は「など」の鼻音が逆行同化し「まど」の d が鼻音化した現象である。

5) 音交換

- (a) 隣接音との交換
- (1) しみじ (しじみ)
- (2) たがも (たまご)
- (3) IOCサラマ (マラ) ンチ会長
- (4) かんせんき [換気扇]
- (5) あやま (まや) かされてる
- (6) ひとたわ (わた)り
- (7) 出ぶし (しぶ)って
- (8) おむつ (つむ)
- (9) 手引書もと (とも)

(10) さばら(らば)

(11) 1年経つもの(のも)早いもの

音交換が偶発的なものか、それとも何か生理的な理由があるのか、これだけのデータでは結論は出し難いが、伊藤(1985)では前から後に調音点に移るような音に逆転しやすい、という仮説を提出している。この仮説に当てはまるのは(1)(4)(6)(7)(8)(9)(10)(11)である。「タマゴ」を「タガモ」と音転換する例は幼児音にも見られる。tamago は子音の調音が「前—前—後」となるが、tagamo は「前—後—前」となる。このように子音が「前—後—前」となった方が生理的に容易なのかどうか、今後更に検討を要する問題である。

(b) 非隣接音の交換, 転位

(a)では連続して起こる隣接音同士の交換を扱ったのであるが、ここでは一つまたはそれ以上の音を越えて音交換, または転位が行われる場合を扱う。

① 交換

(1) か(く)び〔首〕く(か)しげた方がよい

(2) せんすこうしゅ〔選手コース〕

(3) いった(さ)んかさ(た)んそ〔一酸化炭素〕

(4) 工事べんが〔現場〕

(5) ジングルジャム〔ジャングルジム〕

(6) 飾りつき(け)がすけ(き)なの

ギャレット(Garrett, 1980, p. 184)も述べているように、似た者同士は交換しやすい。(1)では「か」と「く」は同じ[k]音で、(2)は[s]と[ʃ]という同じ歯擦音であり、(3)では[s]と[t]は調音点が似ており、幼児の場合[s]の代わりに[t]を使用する段階がある。(4)では「べ」と「が」両方とも同じ濁音であり、(5)も同じ理由による。(6)も同じ /k/ 音である。

次の三つは交換音の間に、余り類似性のない例である。

(7) 野には(さ)くさ(は)な

(8) と(も)もえ, も(と)もかず〔百恵, 友和〕

(9) き(し)んかんせんのし(き)っぷ〔新幹線の切符〕

② 転位(shifts)

(10) ざいば(つ)かいたつ(い)〔財閥解体〕

- (11) ばんびじゅんたん [準備万端]
- (12) ライオン [アイロン]
- (13) ふくらっ [ふっくら]
- (14) きのり [乗り気]
- (15) いつのか間に [いつの間にか]
- (16) ほとんど (ど) けいご (こ) はじめ
- (17) がき (かぎ)

(10)では句中の「つ」が句尾に転位し、「い」と置換わったという現象である。(11)では zyun bi ban tan が 3-2-1-4 と逆転してしまった珍しい音転換である。(12)は airon の /r/ が語頭に転位したものである。(13)は hukkura→hukurak, (14)は noriki→kinori と各々、音転位したものである。(15)は句尾の「か」が句中に転位し、また(16)は句中の「ど」の濁音が「けいご」の「こ」に転位したものである。(16)の濁音転位は句尾の「じ」に影響されたものと思われる。(17)も同じく濁音の転位である。

③ 音の脱落

- (1) どじ(り)っばなし
- (2) 溢れるばか(り)の愛情
- (3) 大人よ(り)か子供の方が確かな目を持っている
- (4) ひと(り)ぐらし
- (5) シンデ(レ)ラ
- (6) 有(り)よく [有力] (田総 1982, p. 211)
- (7) いな(り)ずし [稲荷寿司] (同上)
- (8) ちょっとか(ら)いけど
- (9) the d-g (drug) (Shattuck, 1979)
- (10) むずか(し)さ
- (11) つっぱ(し)りたい
- (12) 決議(し)ました
- (13) なま(ぐさ)くない
- (14) If this is too mentalitic (mentalistic) for you (Shattuck, 1979)
- (15) コ(ゴ)ーサイン
- (16) ごうた(だつ) [強奪] された
- (17) タイフ(プ)

(1)から(9)までは /r/ 音, そして(10)から(14)までは /s/ が各々脱落している。/r/ と /s/ が脱落しやすいということはどういうことであろうか。幼児の言語獲得において習得困難とされているのが /r/ /s/ 音で, 言語遅滞児の言語訓練の中で特にラ行音, サ行音は難しいとされている(笹沼他編, 1986, 74頁)。つまり, 音声学的にいて, /r/ /s/ 音は共に構音上, 筋肉の緊張を, 従って労力を要するので, スピードのある話しことばにおいては, 構音上労力を要する音は脱落しやすいと思われる。伊藤(1986)において指摘されているように, 方言でも /r/ や /s/ 音が脱落しやすいということは興味深い。(15)(16)は濁音が脱落したもので, (17)は /p/ が /h/ に変化したものである。

2. 形態音形変化上の誤り

- (1) 熱いそう(熱そう)
- (2) 面白いそうな役(面白そうな役)
- (3) 寒いかった(寒かった)

(1)から(3)までは, 形容詞の原型に「そう」とか「かった」といった助動詞が付く場合には「い」が落ちるという語形上の変化がなされないまま発話されたものである。

- (4) き(く)るよ(来るよ)
- (5) き(こ)なきゃ
- (6) 帰ってき(こ)られない
- (7) 早くき(こ)ないと
- (8) き(こ)られへん
- (9) あとで出てく(き)ます
- (10) 買ってく(き)た方がいいの

「来」は「ない」の前では「こ」に, 「ます」の前では「き」に, といったように変化するのであるが, 語形変化上, 未調整のまま発話され易いといえよう。

- (11) 止めろ(よ)う
- (12) まるめろ(よ)うと思って
- (13) 料理一杯でないといやだ(な)の
- (14) その位だ(な)の

- (15) どっちも知らないいくて
- (16) 知ってない人があれば…
- (17) すばらしいいでした
- (18) すばらしい(く)元氣ですね
- (19) すばらしいいうまい攻め

(11)は〔tomer+yoo〕という基底形で〔r〕が脱落すべきところを〔yoo〕の〔y〕が脱落してしまった結果生じた誤形で、(12)も同様である。(13)(14)は終止形〔だ〕が終助詞〔の〕の前では〔な〕に変化しなければならない、という規則が適用されないまま発話されたものである。これは幼児表現にもよくみられる誤用である。(15)は〔知らない〕の語尾の〔い〕の脱落がなされなままの形で表出したものである。また(16)は「持ってない」「買ってない」等からの類推で形成された誤形である。(17)は現在形である「すばらしいです」の「す」を過去形に変えた形がそのまま表出したもので、「すばらしい」は「すばらしかった」という過去形に変わる、という規則が適用されていない形である。日本語学習中の外国人にも「うれしいでした」のような誤用が、初級から上級にいたるまで見受けられる(宮崎 1976)。(18)(19)は形容詞形が副詞化していない形である。

3. 統語上の誤用

1) 助詞の誤用

(a)を→が

- (1) 荷物が全部おいて行くの？
- (2) リズムがつかみかけていますよ
- (3) 年が取るにつれて
- (4) 寒気団の影響が受けそうで
- (5) お母さんに影響が受ける
- (6) 駅前にマンションが建設中です
- (7) 予断が許さない
- (8) 影がひそめている

文頭に主格の〔が〕が来る確率が高いために、前後の関係に注意する間もなく主格の「が」を付けてしまったという誤りで、格標識付与の誤りとしては最も数が多い。

(b)が→を

- (9) 力より技をまさっております
- (10) 家を崩壊した子供たち
- (11) 歌を上手ですし……
- (12) 音楽的感覚をすぐわかるとか……
- (13) 歌をうまくなって……
- (14) 五社を含まれていまして……
- (15) 芽を出たらつんでしまう

(1)~(8)とは逆に、主格標識「が」を付与すべきところに目的格標識の「を」を誤って付した誤用で、格標識付与の誤りでは二番目に多いものである。唯、(12)では「わかる」ではなく「理解できる」であれば文法的であるので「…を」まで来て、次の語彙選択を間違った、という判断を下すこともできる。また、(14)は「含まれ」を「含んで」とすれば文法関係がうまく流れていたもので、必ずしも、格標識付与の誤りに見做すことが正しいのか、判断は難しい。

(c)に→を

- (16) 150万人を達した
- (17) 素顔を触れてみたい
- (18) 100人をあまる人
- (19) 経済的改革を着手する

より一般的な目的を表わす「を」が、特定の目的を表わす「に」に取ってかわった誤りで、日本語を習得中の外国人もおかす誤りの一つである。外国人の誤用に次のようなものがある。

体を気をつけて下さい

私はあなたの意見を反対します (鈴木 忍, 1978)

(d)に→で

- (20) みんなでやられてるのに……

(e)に→へ

- (21) 御近所の方へも鶴を折って頂きましょう

(f)に→は

- (22) そちはある?

(g)で→を

23) よく目をたしかめて

このように見て来ると、主格と目的格の標識の入れかえの誤りが最も多い。その理由として、文頭に両者のいずれかが来る場合の頻度が最も高く、従って相互入替えの確率も高くなることが察知できよう。又、「に」のような特殊な格助詞よりも「を」のような、より一般的な目的関係を表わす格助詞が使われやすい、ということもいえよう。

2) 助詞の脱落

- (1) 日本人全体 (の) 問題
- (2) それの下 (の) わけよ
- (3) やめている生徒 (の) 問題
- (4) きれい (に) している
- (5) アメリカが行動 (に) 出るとしても……
- (6) 明らか (に) したので
- (7) 対象 (と) している
- (8) 啞然 (と) するような……
- (9) そういう印象 (が) しましたね
- (10) 何故手 (を) たたくの

話の最中に脱落しやすい要素は、一般的にはコミュニケーションにとって冗長度 (redundancy) が高く、前後の関係から聞き手が補えるようなものである場合が多い。「の」「に」「と」等は、前後関係から聞き手が補え、伝達に必須の要素ではないことを話し手は無意識のうちに判断しており、そういった「なくても済む」(dispensable) 要素が省略され易いといえよう。別の見方をすれば、脱落しやすい助詞は文法上余り重要でなく、コミュニケーションに支障を来たさないようなものであるといえる。特に、(3)の「生徒問題」は文脈によってはそのまま使われ得るし、(9)では「印象」の後が「でした」となれば「が」は不必要となる。また(10)は、くだけた会話では「を」が省略されるのが普通であらう。

3) 語句の交替

- (1) 寒の越梅 (←越の寒梅)
- (2) 社民党 (←民社党)
- (3) 内幕 (←幕内)
- (4) 遊園会 (←園遊会)

- (5) ジョンクラ ダクラ (←女クラ 男クラ) [女性クラス 男性クラス]
- (6) そっさく (←早速)
- (7) ガソリンの中に口入れる (←口の中にガソリン入れる)
- (8) トイレに二階がある (←二階にトイレがある)
- (9) コウさん男だけか (←男はコウさんだけか)
- (10) お父さんの昔のみたい (←昔のお父さんみたい)
- (11) 木のなる金 (←金のなる木)
- (12) おリンゴ見てるものだからテレビむけない (←テレビみてるものだからリンゴむけない)
- (13) 唯一のたたきホームラン得点を (←唯一のホームランで得点をたたき出した)
- (14) ちがいの方針 (←方針のちがい)
- (15) 泥に顔ぬって (←顔に泥ぬって)
- (16) 一致が意見した (←意見が一致した)
- (17) 六度くらいしかまで (←…までしか)
- (18) そこはだけ (←そこだけは)

(1)から(6)までは意味の塊を成す語句で、こういった成句内での入替は比較的起こりやすい (Garrett, 1980)。(3)(4)は語を入替えても有意味な語句である、ということが入替えの原因になっているとも考えられる。(7)から(15)までは、助詞とか助動詞はそのまま、主として名詞を中心にした「内容語」(content words)が入替わるという現象である。ギャレット(1980)は助詞とか助動詞のような統語機能の枠組になる、いわゆる「機能語」(function words)は内容語よりも先に指定されており、そこへ内容語が挿入される際に「入替え」(exchange)が起こりやすいのである、としている。唯、(13)はやや複雑な交換であり、(17)(18)は助動詞同士の交換である。

ギャレット(1980)も語の交換例として次のようなものを挙げている。

- (19) You should see the one I kept pinned on the room to my door.
(door to my room)
- (20) I left the briefcase in my cigar.
(cigar in my briefcase)
- (21) Is there a cigarette building in this machine?

(cigarette machine in this building?)

(22) This spring has a seat in it.

(seat has a spring in it)

(23) Older men choose to tend younger wives.

(tend to choose)

(24) No one is taking you into talking a nap.

(talking you into taking a nap)

上の(8)から(15)までの誤りを比較してみると共通部分が多い。すでに述べたように、前置詞とか代名詞といった機能語はそのままで、内容語が入替わっているだけであり、「統語機能枠」(‘planning frame’ とギャレットは呼んでいる)は固定されたままである。交換される語の品詞 (grammatical category) は同一の場合が圧倒的に多い、と付け加えている。

4) 省 略

(1) 電話 (番号) が書いてあるよ () 内が省略されている。

(2) 大正 (堂名) 物

(3) 金 (持ち) になると……

(4) テレビ (の番組) 見たんだもん

(5) 13 (日) 目

(6) 昨日も今日 (と同じ道) 行ったの?

(7) いい空気 (の所) へ行って……

(8) スプーン (を使う人は) ぼくに呼んで (言って) 下さい

(9) スタジオの (テーブルの) 上には……

(10) 友達 (のところで) でパーティをやった

(1)から(5)までは塊りとしての名詞句の一部が脱落しているのであるが、興味深いのは、「電話」とか「大正」「金」といった重要な部分は省略されない、という事実である。話者は不注意とか疲労等の心理的理由で名詞句の一部を脱落させる場合に、コミュニケーションにとって重要な部分とそうでない部分とを区別している、といえよう。(8)では脱落と入替の両方の誤りがおかされている。

5) 副詞の誤用

(1) あんまりいやだ

(2) あんまり僕はいやだった

- (3) あんまりきらってた
- (4) あんまりきらわれているんだよね
- (5) あんまりきらい
- (6) あんまりなくなる
- (7) 余り心配することは少ないです
- (8) あんまり弱くしなかった

「余り」は否定的な意味を持った副詞で、「余りよくない」とか「余り知らなかった」のように「～ない」という否定辞と呼応する場合が多い。(4)とか(8)では否定辞に引っぱられて「余り」が使われたのではないかと思われる。(1)(2)の「いやだ」、(3)(4)(5)の「きらい」は意味的には否定を表わしているので、それに引かれて「余り」が使われたと考えられる。(1)(2)の「いやだ」を類義語の「好きで(は)ない」に変えれば、全く文法的な文になる。(7)は「少ない」という否定的な意味を表わす語に引かれて「余り」が使われたものであろう。

- (9) そう滅多に珍らしくない
- (10) 滅多に珍しい
- (11) なかなか知らないことが多い
- (12) たった半年経った(しか経っていない)時に……
- (13) 中味がたいして少ないし
- (14) すっかり知らなかった
- (15) 一応頼りにならない
- (16) ちっともかっこわるい

(9)(10)の「滅多に」は「来ない」とか「～しない」といった否定につながる副詞である。(9)では「…ない」という否定詞に誘発されたものであろう。(10)は「珍しい」が「普通でない」といった否定的意味を表わすので「滅多に」という否定的副詞が共起したのではないかと思われる。(11)の「なかなか」も「来ない」といった否定的表現と共起する場合が多いための誤用であろう。(12)の「たった」も「～しか～ない」といった否定的な意味に使われる場合が多いが、「～しか経っていない」というべきところを否定形化していない誤りである。(13)では「たいして」という否定的意味を表わす副詞が「少ない」という否定的な意味を持った語に誘発されたものであろう。(14)の「すっかり」は普通「よくなった」とか「お世話になった」とい

った肯定形に使われる副詞であるが、「知らなかった」が「忘れていた」と同義であるために誤用されたものと思われる。(15)の「一応」も肯定的な意味に使われる副詞であり、誤用であるといえよう。(16)の「ちっとも」は「～ない」という否定辞と共起するので、「かっこよくない」ならば文法的となる。

参考文献

- Culter, A. (Ed.) 1982 *Slips of the Tongue and Language Production*. Amsterdam: Mouton.
- Fromkin, V.A. (Ed.) 1980 *Errors in Linguistic Performance: Slips of the tongue, ear, pen, and hand*. New York: Academic Press.
- Garrett, M. 1980 "Levels of processing in speech production" In B. Butterworth (Ed.) *Language Production. Volume 1 Speech and Talk*. New York: Academic Press.
- 伊藤克敏 1985 「言い誤りの心理言語学的考察」神奈川大学『人文研究』第91集。
- 伊藤克敏・牧内勝・本名信行(編著) 1986 『ことばと人間——新しい言語学への試み』三省堂。
- 宮崎茂子 1976 「第二言語習得の問題点〈日本語の学習におけるエラー・アナリシス〉」『言語』(大修館書店) Vol. 5. No. 10.
- Shattuck-Hufnagel, S. 1979 "Speech errors as evidence for a serial-ordering mechanism in sentence production" In W. Cooper and E.C.T. Walker (Eds.) *Sentence Processing: Psycholinguistic studies presented to Merrill Garrett*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 笹沼澄子・柴崎良子(編) 1986 『ことばを取り戻した子どもたち』大修館書店。
- 鈴木忍 1978 『文法Ⅰ——助詞の諸問題』国際交流基金。
- 田総武光 1982 『言葉のとちり』今井書店。